慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本人女性スパイ南造雲子をめぐる言説の生成と展開
Sub Title	Engendering and transformation of the discourse on Nanzo Kumoko, a Jpanese female spy
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.111, (2016. 12) ,p.185 (20)- 204 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根謙教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01110001-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本人女性スパイ南造雲子をめぐる言説の生成と展開

杉野　元子

はじめに

日中戦争時期に活躍した女性スパイとして真っ先に名前が挙がるのは川島芳子であろう。筆者は以前、「中国語圏映画における川島芳子の表象」という論文[1]を執筆して、中国、香港、台湾で制作された映画 13 作品における川島芳子の表象について考察を加えたことがある。論文執筆後、その延長線上で、中国語圏テレビドラマにおける川島芳子の表象についても調べようと思い、登場人物の中に川島芳子の名前がある中国テレビドラマ『香草美人』（全 32 回、2011 年）を視聴した。このドラマは、日中戦争時期の上海が主な舞台で、川島芳子は第 6 回から登場するが、第 8 回では早くも画面から姿を消す。その代わりに南造雲子という奇妙な名前の日本人女性スパイが第 1 回から登場して、第 23 回で国民党特務機関・軍事委員会調査統計局（略称：軍統）の地下工作員に殺されるまで、日本軍上海特務機関トップとして辣腕を振るう。このドラマには他にも多くの日本人が登場するが、いずれも土肥原賢二、中西功、武田義雄、清水一郎など、実在の人物の名前あるいは日本人として違和感のない架空の名前がつけられている。筆者は、このドラマの脚本家がなぜ主要登場人物である日本人によりによって南造雲子という、奇妙で不自然な名前をつけたのか、不思議であった。ところが、ふと思い立って「南造雲子」を中国最大の検索エンジン「百度」で検索すると、10 万件以上の検索結果が表示された。単なる一つのドラマに登場する架空の人物であれば、これほど多くの検索結果が表示されるはずはない。そこで南造雲子について調べをすすめていくと、どうやら中国では一般に、南造雲子が実在の人物であると見なされていて、南造雲子の人物像を紹介する文章やテレビドキ

ュメンタリー、南造雲子をモデルにしたテレビドラマや小説が多数存在することがわかった。産経新聞中国総局（北京）特派員・矢板明夫も外信コラム「南造雲子ってだれ？」（2010 年 1 月 20 日）の中で、「中国で最近、日中戦争を振り返る記事やテレビ番組でよく取り上げられる日本人女性スパイ」南造雲子がいることを紹介し、「現在進められている日中両国の有識者による共同歴史研究で、南造雲子の正体についてぜひ調べてもらいたい」と書いている[2]。

そこで本稿では、南造雲子という人物が日本ではまったくの無名であるにもかかわらず、中国では日本人大物女性スパイとしていろいろなメディアで盛んに取り上げられているという不思議な現象に注目して、このような現象を生み出した背景について考察する。まず、南造雲子とはいったいどのような人物なのか、中国側の資料をもとにその人物像を明らかにする。次に、中国において南造雲子に関する言説がいつごろから生成されるようになったのか、という言説の原点を探るとともに、南造雲子というスパイが本当に実在したのかという謎にもせまる。さらに南造雲子をめぐる言説が現在に至るまでどのように展開して、どのように変容を遂げたのかという点についても、できうる限り詳細に跡づけることを目指す。

一、南造雲子に関する文献資料

「中国期刊全文数拠庫」（1994 年以降に中国本土で発行された重要雑誌データベース）を用いて「南造雲子」という単語を全文検索すると、80 本以上の文献が検索されるが、その中で、南造雲子を中心に据えて書かれているものは次に示す 12 本の文献である。

文献① 許正雄「“帝国之花” 謀殺蔣介石」、『文史精華』1995 年 1 期、31 ～ 33 頁。
文献② 安国「抗戦中的日本女間諜南造雲子」、『紅岩春秋』1995 年 2 期、11 ～ 12 頁。
文献③ 王勇「罪悪的 “帝国之花” ── 日本間諜南造雲子」、『文史春秋』2002 年 3 期、21 ～ 22 頁。
文献④ 小梅「鮮為人知的日本女間諜南造雲子」、『国家安全通訊』2003 年 5 期、47 ～ 48 頁。

文献⑤ 禾竣「神秘女諜斃命在軍統特工槍口之下」、『国防』2004 年 3 期、57 頁。
文献⑥ 沙平「“帝国之花” 凋謝上海灘」、『檔案時空』2004 年 1 期、12 ～ 14 頁。
文献⑦ 潘沢慶「抗戦初期日諜刺蔣案」、『文史春秋』2007 年 10 期、24 ～ 25 頁。
文献⑧ 劉維栄「黄浚与日本女間諜南造雲子」、『檔案天地』2007 年 3 期、28 ～ 30 頁。
文献⑨ 林楚「日本女間諜 “ 帝国之花 ” 之死」、『僑園』2009 年 4 期、48 ～ 49 頁[3]。
文献⑩ 王学亮「潜伏在蔣介石身辺的日本間諜」、『党史縦横』2010 年 7 期、4 ～ 7 頁。
文献⑪ 唐厚梅「南造雲子：令蔣介石肝寒的日本女諜」、『湖北檔案』2011 年 5 期、44 ～ 45 頁。
文献⑫ 胡平「南造雲子：“日本第一女諜” 疑雲」、『同舟共進』2012 年 7 期、33 ～ 37 頁。

この 12 本の文献は、すべて参考文献が示されてなく、南造雲子に関する記述が何を拠り所としているのか、まったくの不明である。そのため、どの文献の記述がより史実に正確であるかを比較して検討を加えることは困難である。しかしこの 12 本の文献における南造雲子像は、細部では記述が異なり、齟齬が生じているものの、おおよそのところでは一致している。そこで適宜いくつかの文献を参照しながら、南造雲子像の大まかな輪郭を捉えることとする。

二、南造雲子の経歴

南造雲子（1909 年～ 1942 年）の生涯を、1909 年から 1929 年までの上海・日本・大連時代、1929 年から 1937 年までの南京時代、1938 年から 1942 年までの上海時代、という三つの時期に区分して、その足跡をたどる。

（1）1909 年から 1929 年までの上海・日本・大連時代

1909 年から 1929 年までの南造雲子について、もっとも詳細に書いているのは文献③である。該当部分を引用する。

> 南造雲子は 1909 年、上海で生まれた。家は虹口日本租界の横浜路にあった。父親の南造次朗はベテランのスパイで、表の顔は正金日本語補習学校教師

であった。彼は中国語と上海語を流暢に話すことができ、頭山満が牛耳る黒龍会に加わったことがあり、日本軍国主義思想によって洗脳されていた。南造雲子は小さいときから父親の薫陶を受け、中国人を見下し、大和民族が世界でもっとも優秀な民族であると思っていた。13 歳のときに日本に送られ、神戸市のスパイ学校に入り、文化や外国語（中国語や英語など）のほかに、射撃、爆破、扮装、毒物の扱いなどの専門技術を学んだ。スパイの親玉・土肥原はかつて彼女の教官だったことがある。17 歳のとき、南造雲子は大連に派遣され、もっぱら諜報活動に従事する。1929 年、大連から南京へ派遣される。[4]

南造雲子の生い立ちについて、横浜路、南造次朗（他の文献では「次郎」となっているものが多い）、正金日本語補習学校、頭山満、黒龍会、土肥原といった固有名詞を用いながらかなり具体的に書かれている。しかし一番肝心な、雲子のその後の人生を決定づけたスパイ養成学校については、学校名が書かれていない。他の文献においても、この学校の名称は明らかにされていない。日本のスパイ養成機関としては陸軍中野学校が知られているが、創設は 1938 年であり、入学できたのは男性のみである。1920 年代の日本に、10 代前半の少女を受け入れ、スパイになるための訓練をほどこす学校があったというのは、いかにも胡散臭い。また文献③以外にも多くの文献において、土肥原賢二が雲子の指導をおこなったとされているが、この点もはなはだ疑わしい。土肥原の経歴を調べてみたが、1940 年に陸軍士官学校校長に就任しているものの、1920 年代に教育機関で教官を務めたという記録は見つからなかった。

（2）1929 年から 1937 年までの南京時代

南京時代の雲子はスパイとして辣腕を振るい、目覚ましい働きを見せる。南京時代の雲子がおこなった諜報活動の具体例を、まず文献④を用いて三つ紹介し、次に他の文献を用いて補足する。

一つ目は、重要な軍事設備に関する情報を盗んだことである。1929 年、雲子は廖雅権という偽名を使い、南京郊外にある温泉招待所の接待係となる。温泉招待所は国民党軍部が出資して建てた場所で、要人がしばしばここに集まり秘密軍事会議を開いていた。美貌に恵まれ、歌も踊りも上手な雲子は、要人たちをとり

こにして、重要な軍事情報を引き出した。その一つが、国民党呉淞要塞司令部が国防部に対しておこなった砲台軍事設備増設に関する報告である。

二つ目は、重大な軍事作戦を失敗に追い込んだことである。1937 年 7 月中旬、南京市内に潜入した雲子は、国民党行政院主任秘書黄浚、外交部副科長黄晟（黄浚の息子）を誘惑して協力者に仕立てる。そしてすぐに参謀本部、海軍部、軍政部にスパイ網を確立した。1937 年 7 月 28 日、蔣介石は最高国防会議を開き、長江下流の江陰水域で航路を遮断することにより、長江中流、上流の日本軍艦船を封じ込めて殲滅しようとした。この会議に出席していた黄浚がこの情報を雲子に伝えたため、日本側が知ることとなり、すばやく艦船を河口に移動させたため、中国軍の作戦は失敗に終わった。

三つ目は、蔣介石の暗殺未遂に二度関与したことである。最初の暗殺未遂は 1937 年 8 月初めに起きた。蔣介石が中央軍校で講話をおこなう日に、二人の怪しい人物が校内に紛れこんだ。捕まえようとしたが、二人は車で逃げ去った。後日調べたところ、二人が逃走に使った車は黄浚の車であることが判明した。この事件のあと間もなく、第二次上海事件が勃発する。8 月 25 日、最高軍事会議が開かれ、翌日、蔣介石が身の安全を図るために中立国イギリスの大使の車に同乗して上海へ行き、前線を視察することが決まった。会議後、黄浚は雲子にこの情報を伝えた。26 日、イギリス大使の車は移動中、日本軍の軍用機から攻撃を受け、大使が重傷を負うという事件が発生した。蔣介石は急用のため、上海行きを中止したため、巻き込まれずにすんだ。

以上、文献④に基づき、雲子のスパイ活動の具体例を三つ挙げたが、この他に文献①②③⑥⑫では、雲子が蔣介石の盟友である考試院院長・戴季陶と親しい関係となり、戴季陶から機密情報を引き出したと書かれている。このように南京時代の雲子は、スパイとして赫々たる実績を積み上げるのだが、南京時代の最後にもう一つ、度肝を抜くようなことを成し遂げる。1937 年 9 月中旬ごろ、黄浚スパイ集団と南造雲子は逮捕される。黄浚と黄晟は公開処刑されるが、南造雲子は死刑を免れ無期懲役となり、老虎橋監獄に収監される。ところが雲子は巧みに看守の協力をとりつけ、なんと脱獄に成功したのである。

（3）1938 年から 1942 年までの上海時代

文献①～⑫は、南京時代の雲子について詳細に記述しているが、上海時代にな

ると急に具体的な記述がほとんどなくなる。文献②を例に取り、上海時代の雲子について書かれている箇所を引用する。

> 彼女〔南造雲子――引用者注〕は戦争のどさくさに紛れて監獄を逃げ出したあと、ずっと上海で活動を続けた。国民党軍統は何度も人を送り込み、彼女を暗殺しようとしたが、すべて成功しなかった。1942 年 4 月のある夜、南造雲子は独りで車を運転して外出しているとき、フランス租界霞飛路（現在の淮海中路）の百楽門喫茶店付近で、軍統工作員三名の待ち伏せに遭う。チャイナドレスを身につけた南造雲子は三発被弾し、病院に運ばれる途中、死去した。

雲子が殺害される場面は、細部にわたって生々しく描写されているが、この最期の場面を除くと、あとは「ずっと上海で活動を続けた」というひと言ですましている。文献⑨⑫には、上海時代の雲子について文献②よりもやや詳しい記述があり、上海特務機関の「特一課課長」となり、抗日志士や軍統工作員を大量に捕まえ、また汪精衛政府の特工総部（通称：ジェスフィールド 76 号）の組織作りにも尽力したと書かれているが、南京時代のような具体例は一切挙げられていない。

三、南造雲子の実在性についての疑義

前節では中国語文献をもとに、南造雲子の生涯を大づかみにたどった。南造雲子は、才色兼備の敏腕スパイで、謀略・諜報活動の方面で次々と目覚ましい成果を残し、中国側に深刻なダメージを与えるのに成功した。そして文献①③⑥⑨⑫のタイトルでも用いられているように、「帝国之花（帝国の花）」、「日本第一女諜（日本一の女性スパイ）」と称されていた。しかし日本のスパイ史上、燦然と輝く存在であるはずにもかかわらず、現在までのところ南造雲子という女性スパイの存在を証拠づけるものは、日本でも中国でも見つかっていない。

前述したように、「南造雲子」という名前は極めて不自然である。「南造」は音読みで「なんぞう」、「雲子」は音読みにすると排泄物と同音になるので、訓読みで「くもこ」となるのであろうが、文字を見ても、音を聞いても、人名としては

大きな違和感を覚える。またこれも前述したことだが、神戸のスパイ養成学校に入学したということも、その学校で土肥原賢二から指導を受けたということも疑わしい。さらに神戸のスパイ養成学校での訓練、南京でのスパイ活動、南京の監獄からの脱走、上海の街頭での射殺などは、まるでスパイ小説やスパイ映画のようであり、刺激に富み、関心を大いにかき立てるが、現実の世界で一人の人間の身にこのようなことがすべて起きたとはにわかには信じがたい。

文献⑫も、雲子の経歴を紹介したあと、その実在性について疑義を呈している。文献⑫の著者・胡平は、1934 年に戴季陶と雲子が曖昧な関係を結んでいた時点で、軍統は雲子をマークしていたのに、雲子はその後も要人と親しく接触して情報を引き出すことができたこと、土肥原の弟子ならば陸軍系スパイであるはずなのに、雲子は海軍系スパイとされていること、雲子は上海で軍党の組織を次々とつぶし、数十名の工作員を逮捕したとされているが、軍統関連の研究文献にも、軍統関係者の回想録にも南造雲子の名前が出てこないこと、などを疑問点として挙げている。

このように南造雲子の実在性については疑わしい点が数多くあるのだが、中国語文献①～⑫の中で疑義を呈しているのは、わずかに文献⑫のみで、他の文献はすべて実在の人物という前提で書かれている。

四、南造雲子に関する映像資料

要人を次々に手玉にとって機密情報を盗み取り、脱獄にも成功した美貌のスパイ・南造雲子の生涯は、映像媒体で取り上げるのにうってつけの素材である。筆者が視聴することができたテレビ番組は次の 6 本であるが、実際にはもっと多くの番組が制作されているであろう。

番組①「諜海風雲 ── 神秘的日本第一女諜」（約 30 分、江西衛視、2011 年 3 月 24 日、歴史番組「経典伝奇」シリーズの中の 1 回。）

番組②「二戦伝奇　人物編 ── 南造雲子」（約 38 分、中国中央電視台、2011 年 5 月 28 日、歴史番組「重訪」シリーズの中の 1 回。）

番組③「第 64 回　刺殺蔣介石之殺機四伏」、「第 65 回　刺殺蔣介石之内憂外患」、「第 66 回　刺殺蔣介石之 “帝国之花” 的凋謝」（各回約 9 分、2011 年 12

月、香港鳳凰衛視、ドキュメンタリー番組「国軍抗戦全紀実」（全100回）の中の3回。）

番組④「民国遺案之金陵鋤奸記」（約23分、上海電視台、2013年7月28日、ドキュメンタリー番組「檔案」シリーズの中の1回。）

番組⑤「“帝国之花”日女諜南造雲子　操盤刺殺蔣介石之謎揭密」（約7分、台湾中天新聞台、2013年11月11日。トーク番組「新聞龍捲風」の中で、知本家文化社社長・劉燦栄が南造雲子について語った。）

番組⑥「日本著名女間諜南造雲子」（約3分、香港鳳凰衛視、2014年2月14日。歴史番組「大外交新思惟」シリーズの中の1回。）

中国語圏（中国本土、香港、台湾）では、南造雲子を取り上げたテレビ番組が2011年以降だけでも6本制作されている。テレビ番組で紹介された南造雲子の経歴は、文献①～⑫と同様、細部で異同があるが、おおよその輪郭は一致している。この6本のうち2本（番組②、⑤）は、南造雲子の実在性について疑義を抱く人がいることに言及しているが、最後に簡単に触れるだけで、深く掘り下げてその疑義について追求するという内容ではない。また4本（番組①、③、④、⑥）は、南造雲子を実在の人物として取り上げている。中国語圏テレビ番組においても、中国語文献と同様、根拠は何も示されないまま、南造雲子を実在の人物として、その生涯を紹介するという傾向が強く見られる。

五、南造雲子に関する言説の原点

近年中国では、南造雲子の存在に注目が集まり、文字媒体、映像媒体で盛んに取り上げられているが、いったいいつごろから南造雲子の存在が人々に知られるようになったのであろうか。南造雲子の存在と活躍ぶりを示す何らかの同時代史料や関係者の証言があり、そこを原点として南造雲子に関する言説が形作られるようになったはずである。しかし、現在までのところ、そのような文献や証言は発見されてなく、どのような経緯で、南造雲子に関する言説が生成したのか、大きな謎となっている。

この謎に対する答えとして、一つの仮説を提示したい。仇章という作家が1943年にスパイ小説『遭遇了支那間諜網』（広東省曲江・図騰出版社）を出版し

た。この小説の中に南造雲子という人物が登場するのだが、筆者はこの南造雲子（以下、「43 年版雲子」と略す）が、中国で近年いろいろなメディアで取り上げられる南造雲子（以下、「現行版雲子」と略す）のルーツではないかと考える。

『遭遇了支那間諜網』は、重慶国民政府のスパイ第五号情報員を主人公として、日本側スパイとのしのぎを削る戦いを描いている。前半は徐州や鎮江などの華中、後半は香港や広州などの華南が舞台となっているが、南造雲子は前半に登場するので、前半部分のあらすじを紹介する。

第五号情報員（以下、「第五号」と略す）とＢ情報員（女性）は父親が中国人、母親が日本人で、日本で生まれ育った。二人は学生時代、山機桜子、南造雲子と親しくなり、いつも行動をともにしていたため、同級生から「四兄妹」と呼ばれていた。卒業後、山機桜子と南造雲子は日本側スパイとなり、第五号とＢ情報員は中国へ行き、中国側スパイとなる。第五号は徐州会戦の行方を左右する重要軍事拠点を奪い返すために、特務決死隊を結成して指揮する。作戦遂行中、特務決死隊は第五号を除き全員死亡した。第五号は負傷して捕虜となり、日本軍の野戦病院に収容されるが、そこで南造雲子と再会する。日中戦争が始まる前、第五号と雲子は恋人同士だった。第五号が病院から脱出しようとしたとき、雲子に見つかるが、雲子はそのまま見逃した。南造雲子は通敵罪で逮捕され、百日以内に第五号を捕らえることによって罪をつぐなうことになった。雲子は特務機関責任者となり、部下 120 名とともに、中国軍が支配する寧波方面に潜入する。第五号は、雲子の潜伏先を訪れ、中国軍に協力するように説得するが、雲子は家族に害が及ぶのを恐れて拒否する。第五号は国家への忠誠と雲子への愛情の板挟みになるが、やむなく雲子を射殺する。

『遭遇了支那間諜網』に登場する 43 年版雲子は、九州生まれで、実らぬ恋と知りながらも第五号を一途に愛するという哀れで純粋な面をもっている。そして華中の戦地でスパイ活動をおこない、1938 年、寧波で第五号によって射殺される。いっぽう現行版雲子は、上海生まれで、美貌を武器に敵側要人を次々に手玉にとる冷酷非情な女性である。そして南京や上海などの大都市でスパイ活動をおこない、1942 年、上海で軍統工作員によって射殺される。このように 43 年版雲子と現行版雲子は生い立ち、人柄、スパイとして活動した時期や場所などに大きな隔たりがある。

しかし 43 年版雲子と現行版雲子は、類似点がないわけではない。もっとも見

過ごすことのできない重要な類似点は、名前と職業が一致していることである。『遭遇了支那間諜網』の作者である仇章が、日中戦争時期に南造雲子という日本人女性スパイが実際にいたことを何らかの形で知っていて、自分がスパイ小説を書くときに、登場人物の一人にその女性スパイの名前を借用して名付けたという可能性もあるであろう。しかし『遭遇了支那間諜網』の中の日本人の名前が、南造雲子を除き、他はすべて日本人の名前として不自然でない、あるいはそれほど不自然でない場合はその可能性が考えられるが、実際には、南造雲子以外にも、不自然極まりない名前が散見される。

たとえば、第五号、B情報員、南造雲子とともに「四兄妹」と呼ばれていた「山機桜子」が例として挙げられる。「南造雲子」という4文字を見て、もっとも強い違和感を覚えるのは、苗字に「造」という文字が使われていることであろうが、「山機桜子」も同様に、苗字に「機」の文字が使われていて、強い違和感を覚える。また小説の中には、黒龍会女性スパイグループの名前が列挙されている箇所があるが、そこには「千昭子、宮津子、夏嫁子、映川素子、門凌初子、仲実冬子、西奇夏子、露男一子、高藤横子、西尾健子、南弥満子、遠凡正秋子」と書かれていて、その多くが不自然で奇妙である。さらに男性の名前にも、「南造旗遠」、「谷温次郎」、「横一木蔵」などの奇妙な名前がつけられている。小説の中の日本人名がすべて不自然というわけではないが、これほど多くの不自然な名前を目にすると、「南造雲子」という名前も、実在の人物の名前を借用したのではなく、仇章が、日本人女性の名前は「子」で終わるというルールだけを適用し、あとは適当に漢字を組み合わせて作った架空の名前ではないかと思えてくる。

43年版雲子と現行版雲子は、名前や職業以外にも類似点がある。43年版雲子は土肥原と兄の南造旗遠から厳しい訓練を受けたため、第五号にとっても手強い相手であった。土肥原から訓練を受けた点、有能なスパイである点は現行版雲子と一致している。また43年版では雲子自身が、現行版では雲子の父親が黒龍会会員であった。雲子が黒龍会と直接、間接の違いはあるものの、接点があるという点も類似している。

南造雲子の存在を裏付ける史料や証言が発見されていないこと、仇章『遭遇了支那間諜網』に南造雲子という日本人女性スパイが登場すること、仇章『遭遇了支那間諜網』には、南造雲子以外にも不自然な日本人の名前が多数あることから、南造雲子という名前も実在の人物の名前を借用したのではなく、仇章独特の

名付け方法によって編み出されたものの一つであると思われること、などの理由から、筆者は、現行版雲子は43年版雲子を起源として、その後いろいろアレンジが加えられることによって生み出された架空の人物であると考える。

六、43年版雲子から現行版雲子へ

前述したように43年版雲子と現行版雲子の間には大きな隔たりがある。現行版雲子のルーツが、仇章『遭遇了支那間諜網』の登場人物であるとするならば、43年版雲子はどのような経緯をたどって現行版雲子へと変貌を遂げたのであろうか。許定銘は仇章について次のように書いている。

> 仇章（？～1951年）は1940年代、広州と曲江の『環球報』新聞社で勤務していた。彼はスパイ小説家として文壇で名声を馳せていたが、もっとも重要な作品は「遠東間諜戦実録」の『第五号情報員』（曲江正光書局、1943）と『遭遇了支那間諜網』（曲江図騰出版社、1943）である。この二冊はそれぞれ軍人の林薫南中将と張自忠将軍が序文を書いているが、人気を集め、ベストセラーとなった。その後、上海、広州、香港などでも再版され、戦時中、引っ張りだこの読み物であった。[5]

このように、仇章は売れっ子のスパイ小説作家で、その代表作『第五号情報員』と『遭遇了支那間諜網』は、中国各地で多くの読者を獲得していた。筆者の手元にある『遭遇了支那間諜網』は1947年に上海・遠東図書公司が出版した第三版で、第一版は1946年に出版されていることから、日中戦争終結後も人気が持続していたことがわかる。

しかし、中華人民共和国建国後、仇章の作品は逆風にさらされることとなる。1956年1月13日、文化部は反動的図書、卑猥な図書、荒唐無稽な図書を一掃するために、各省、各市の文化局に対して通知を出す。この通知の中で、「徐訏、無名氏、仇章は、政治的に反動的な工作員スパイ活動を描く小説をもっぱら創作している」と名指しで批判された。また同通知には、21名の作家の名前が列挙され、これらの作家が書いた図書には特に注意を払うようにと書かれているが、この21名のブラックリストの中に仇章の名前がある[6]。『第五号情報員』と『遭

遇了支那間諜網』は、優秀な頭脳と技量をもつ中国人スパイグループがさまざまな困難に立ち向かい、見事に任務を達成するまでを描いているが、彼らは蔣介石率いる国民政府に絶対的な忠誠を誓う国民党系スパイであり、この点が問題視されたのであろう。

仇章の小説は1950年代後半の時点ですでに反動的書籍として取り締まりの対象となるが、その後勃発する文化大革命では、言論弾圧が横行する中、よりいっそう厳しい批判にさらされることはあっても、取り締まりの対象からはずされることはなかったであろう。このように1940年代の人気小説『遭遇了支那間諜網』は1950年代後半から1970年代前半まで、人目に触れることもなく、すっかり忘れられた存在になっていた。しかし、文革終結後、『遭遇了支那間諜網』に登場する南造雲子と同じ名前をもつ人物が、実在した日本人大物女性スパイとして脚光を浴びるようになる。筆者は、現行版雲子は43年版雲子を起源とすると考えているが、現行版と43年版とでは人物像に大きな開きがある。そこで現行版と43年版の間を橋渡しする文献があるのではないかと思い、探したところ、1つだけだが見つけることができた。現行版雲子は1995年以降の文献①～⑫の記述にもとづいているが、1995年より早い時期に、南造雲子を主人公とする長編小説が出版されていた。

小説のタイトルは『帝国之花在中国』である。1991年に四川文芸出版社から刊行された。作者は未名星と嘯川客で、これは明らかにペンネームであるが、二人の作品はこの作品を除いて他に見つからず、どのような人物なのかは不明である。本の裏表紙には、「中日スパイ史上、いまだかつて表に出たことがない、人の心を震え上がらせる裏世界の秘話を描いた長編ノンフィクション小説である」と印刷されている。しかし、「紀実小説（ノンフィクション小説）」と銘打たれているものの、参考文献は何も示されていないため、何を根拠としたのか不明である。あらすじを紹介する。

1937年、日本軍スパイ南造雲子は南京に派遣される。軍統は、1932年上海で軍統の優秀なスパイを何人も殺した雲子が南京に潜入したという情報をつかみ、雲子を捕らえようとする。雲子は白玉婉という偽名でダンスホールの歌手となり、行政院秘書黄汀儒と知り合う。二人はすぐに男女の関係に発展して、雲子は黄汀儒から、蔣介石が列車で蘇州へ視察に出かけるという情報を得る。幸い蔣介石は当日予定を変更して飛行機で蘇州へ行ったので助かったが、蔣介石が乗る予

定だった列車は爆破される。黄汀儒は機密情報漏洩罪で逮捕され、銃殺刑となる。雲子は、国家秘密文書保管処へ忍び込もうとして逮捕されるが、護送される途中、逃げるのに成功する。雲子は軍統に追われて逃亡を続け、最後は、自害して果てる。享年 30 歳。雲子には好きな男性がいた。雲子は南京のダンスホールで、かつて学友だった蘇凱と再会する。お互い惹かれあうが、蘇凱は共産党地下工作員で、二人はそれぞれの立場の違いから結びつくことができなかった。雲子は蘇凱に宛てた遺書を残すが、この中で、雲子の父（南造次郎）も祖父（南造賀須）もスパイだったことが明かされる。

『帝国之花在中国』に登場する南造雲子（以下、「91 年版雲子」と略す）と現行版雲子には次のような共通点がある。二人はともに上海で生まれ育ち、父親の次郎もスパイである。ともに日本に行き、神戸のスパイ養成学校に入る。ともに上海と南京（91 年版雲子は先に上海、次に南京、現行版雲子は先に南京、次に上海）でスパイ活動をおこなう。ともに南京へ潜入して、美貌を武器に行政院秘書と親密な関係を結び、機密情報を手に入れる。ともに一度逮捕されるものの、91 年版は護送車から、現行版は監獄から逃げるのに成功する。

いっぽう 91 年版雲子と 43 年版雲子にも共通点がある。91 年版雲子は南京で、43 年版雲子は華中の戦場で、かつて学友だった男性と再会する。その男性は敵側スパイ（91 年版は共産党系スパイ、43 年版は国民党系スパイ）だったため、男性への愛情と仕事への使命感との板挟みとなり、思い悩む。このように 91 年版と現行版には 43 年版にはない共通点があり、91 年版と 43 年版にも現行版に見られない共通点があることから、91 年版雲子は、43 年版雲子が現行版雲子へと変容する過程の途中の姿を留めていると考える。

七、南造雲子と川島芳子

43 年版雲子を原点として 91 年版雲子、そして現行版雲子が形作られたという仮説が成り立つならば、この一連の移行過程で、どうして雲子像が大きく変容を遂げたのか、という謎が残る。筆者はこの謎を解く鍵は川島芳子の存在であると考える。

川島芳子は 1907 年、清朝王族・肅親王の第 14 王女として北京に生まれ、1915 年、川島浪速の養女となり来日する。結婚生活破綻後、日本軍部との関係

が強まり、1931 年、溥儀の皇后婉容の天津脱出に関与、1932 年、上海事変勃発に関与する。また 1933 年には、定国軍総司令官として熱河作戦にも参加する。1945 年 11 月北平で捕えられ、1948 年 3 月 25 日銃殺刑に処せられた。筆者はこの日中戦争時期に活躍した女性スパイ川島芳子の存在が雲子像の変容をもたらしたと考える。

中国における川島芳子像の特徴として、芳子がおこなった謀略活動を過大評価する傾向が見られる。上坂冬子『男装の麗人・川島芳子伝』（文藝春秋、1984 年）や寺尾紗穂『評伝川島芳子：男装のエトランゼ』（文藝春秋、2008 年）など、日本の実証的な研究では、川島芳子と張作霖爆殺事件は無関係だとされている。しかし寧国仕『諜海女梟川島芳子』（瀋陽・白山出版社、2008 年）、李一鳴主編『川島芳子伝』（長春・吉林大学出版社、2010 年）など、中国の文献の中には、根拠を明らかにしないまま、川島芳子が張作霖爆殺事件の裏で暗躍したと見なすものが少なくない。具体的には、川島芳子が張作霖の側近を誘惑して、北京滞在中の張作霖が奉天に戻る日時を聞き出すのに成功、その結果、関東軍による爆殺事件がおきた、ということである。この芳子が関与した張作霖爆殺事件の構図は、雲子が黄浚を誘惑して、蔣介石がイギリス大使の車に同乗する日時を聞き出すのに成功、その結果、日本軍による大使公用車爆撃がおきた、という雲子が関与した蔣介石爆殺未遂事件の構図と極めて類似している。

芳子像が現行版雲子像に投影されていると思われる例はこれだけに留まらない。志英「川島芳子之死」には、真偽の程はかなり疑わしいが、第一次上海事変以後の芳子について、次のように書かれている。

> 1932 年「一・二八淞滬抗戦〔第一次上海事変：引用者注〕」以後、川島芳子はダンサーになりすまして上海に潜伏し、恋人である日本諜報機関トップ田中隆吉と協力しながら情報を収集した。当時は週末ごとに、南京政府の要人たちが上海に来て余暇を楽しんでいたが、川島芳子はこれら政府要人の中で活動した。そしてすぐに一匹の大きな魚を見つけた。それは南京国民政府行政院院長の職にあった孫科である。川島芳子がいろいろ手立てを講じた結果、二人はすぐに親密な関係になった。時が熟すのを待って、川島芳子は孫科に対して、一人の女子大学生が困窮して身を落とすまでの悲しい物語をこしらえて、涙ながらに訴えた。

孫科は川島芳子が入念に編んだ網にひっかかった。そしてほどなくして、彼女を南京行政院に呼び寄せ、側近の秘書にした。川島芳子はやがて行政院の機密をしばしば盗み取るようになり、機会を見計らって田中隆吉に伝えた。この時期の彼女の最大の収穫は、蔣介石がまもなく下野するという情報をすばやく入手したことである。この情報をもとにして、日本は中国侵略の作戦部署の調整を迅速におこなった。しかし、彼女の怪しげな行動は軍統工作員の注意をひいた。軍統はすぐに調査して、この身を落とした元女子大学生であるはずの秘書が実はいわくつきであることがわかった。

ほどなくして、川島芳子は田中隆吉に情報を渡しているときに、軍統工作員に捕まるが、獄中では優遇された。数ヶ月後、日本軍部が裏で手を回してとりなしたため、川島芳子はまったくの無傷で日本に送り戻された。[7]

この一節を読んだとき、筆者は驚いた。理由の一つは、芳子が孫科の秘書となることや軍統によって逮捕されることなど、前述した上坂冬子や寺尾紗穂の研究では触れられていないことが書かれているからである。もう一つの理由は、ここで述べられている芳子の経歴と現行版雲子の経歴がよく似ているからである。志英によると、芳子は、生活に困ってダンサーになった女子学生を装い、上海のダンスホールで行政院院長孫科を誘惑して、機密情報を盗む。機密情報の中には蔣介石下野に関する最高機密も含まれていた。芳子は軍統に逮捕されて入獄するが、日本軍部のとりなしによって釈放される。いっぽう現行版雲子は、生活に困って接待係になった女子学生を装い、南京郊外の招待所で考試院院長戴季陶を誘惑して、機密情報を盗む。また南京市内に潜入して、行政院主任秘書黄浚を誘惑して、機密情報を盗む。機密情報の中には蔣介石前線視察に関する最高機密も含まれていた。雲子は軍統に逮捕されて無期懲役となるが、脱獄に成功する。このように時期や場所など細部は異なるものの、志英版芳子と現行版雲子の経歴は大筋において重なる部分が多い。また潘銀良「川島芳子与“一・二八”事件」などいくつかの中国語文献は、第一次上海事変勃発後、川島芳子が単身呉淞砲台へ潜入して、砲台の状況を調査したと書いているが[8]、この記述も、雲子が呉淞砲台増設に関する軍事情報を盗み出したという記述と似ている。

ここまで具体例を挙げて、中国語文献の中の川島芳子像と現行版雲子像には類似点が多いことを明らかにした。これほど多くの類似点が重なると、もはや偶然

とはいえず、中国で言い伝えられている芳子像の一部が、いつのまにか雲子像に取り込まれたと考えるのが自然であろう。本稿第一節に掲げた文献リストの中の⑩と⑪には、川島芳子の写真が載せられ、⑩の写真には「日本女間諜 ── 南造雲子」、⑪の写真には「南造雲子」というキャプションが付けられている。このことは、芳子のイメージと雲子のイメージが混ざり合い、融合している状態を象徴的に表していると言えよう。

八　南造雲子とテレビドラマ

本稿冒頭で、日本人スパイ南造雲子が登場するテレビドラマ『香草美人』に言及したが、中国では2007年以降、現行版雲子をモデルにしたと思われる人物が登場するテレビドラマが次々と誕生する。放映年代順に紹介する。

ドラマ①　『五号特工組』（全30回、2007年、監督：趙青・虎子、脚本：潘軍）
1937年～1941年の南京・上海などが舞台。竹内雲子は、土肥原賢二の養女で、「間諜之花」と呼ばれている。南京に潜伏して、行政院主任秘書黄浚と深い関係となり、蔣介石暗殺を目論む。逮捕後の脱獄にも成功するが、最後は自殺する。

ドラマ②　『血色沈香』（全28回、2010年、監督：楊小雄、脚本：李自人・張強）
1928年～1931年の鎮江が舞台。国民党スパイ組織と日本軍秘密組織・桜社との暗闘を描く。南造雲子はこの桜社のメンバーである。結末では、南造雲子は鎮江を離れ、南京国民政府軍政部招待所に潜入する。

ドラマ③　『旗袍』（全47回、2011年、監督：李舒、脚本：王彪・海飛）
1940年代前半の上海が舞台。中野雲子は日本軍梅機関のスパイで、「帝国之花」と呼ばれている。国民党特務組織や共産党地下組織を相手に辣腕を振るうが、最後は共産党地下工作員によって射殺される。

ドラマ④　『香草美人（別名：代号香草美人）』（全32回、2011年、監督：侯明傑、脚本：石小克）
1935年～1945年の上海が舞台。南造雲子は日本軍梅機関のスパイで、「帝国之花」と呼ばれている。国民党特務組織や共産党地下組織

を相手に辣腕を振るうが、最後は軍統工作員によって射殺される。

ドラマ⑤　『智者無敵』（全 30 回、2011 年、監督：簡川訴、脚本：石小克）
1940 年代前半の上海が舞台。石川雲子は日本駐上海憲兵司令部特高課長で、「帝国之花」と呼ばれている。心を寄せている男性を捕まえるようにと命令されたとき、命令に背いてその男性を逃がしたため、梅機関トップによって射殺される。

ドラマ⑥　『血色桜花（別名：乱世情縁）』（全 30 回、2011 年、監督：沈雷、脚本：黎凡・何潔・龐鉄明）
1935 年～ 1937 年の上海が舞台。川島雲子は黒龍会会長川島雄一の娘である。父親とともに上海に来た雲子は、恋人・雲天の心変わりを知り、復讐のために黒龍会に入る。結末では、共産党員となった雲天が日本軍の弾薬庫を爆破しようとして、川島雄一に見つかる。川島が雲天を撃つ瞬間、雲子は雲天の前に出て、弾を受けて亡くなる。

ドラマ⑦　『紅狐行動（別名：玫瑰行動、玫瑰殺豺狼、紅狐、紅顔剣出鞘）』（全 32 回、2013 年、監督：鄧方南、脚本 : 鄧方南、黄起）
1945 年の無錫が舞台。新四軍は日本軍と諜報戦を繰り広げる。特高課トップ南造雲子は辣腕を振るうが、最後は新四軍によって射殺される。

中国では、2005 年のスパイドラマ『暗算』（全 40 回、監督：柳雲龍、脚本：麦家・楊健）の大ヒットを契機に、スパイドラマ旋風が巻き起こる[9]。スパイドラマブームの中、「帝国之花」、「日本第一女諜」と称される現行版雲子に白羽の矢が立てられるのは、当然の成り行きであろう。2007 年に現行版雲子をモデルとする女性スパイ・竹内雲子が登場するドラマ①が放映された。ドラマ①～⑦の中で、①の竹内雲子がもっとも現行版雲子に近い人物設定となっている。ドラマ①は中国全土で高い視聴率を獲得し、2012 年には第二部も放映された。そしてドラマ①の成功に刺激されたのであろうが、その後、現行版雲子をモデルとしつつ、その枠をはみ出して、大胆なアレンジが加えられた雲子（②④⑦は南造雲子、③は中野雲子、⑤は石川雲子、⑥は川島雲子）が登場するドラマが雨後の筍のように現れる。2011 年は中国におけるスパイドラマブームが最高潮に達した時期であるが[10]、この年には 4 作品（③～⑥）が放映された。

おわりに

本稿では南造雲子をめぐる二つの謎について、解明を試みた。一つ目の謎は、南造雲子は実在の人物であるか、ということである。中国では南造雲子を実在の人物と見なす傾向が強く、その生涯を紹介する文章やドキュメンタリー番組が数多く存在する。しかし筆者は、南造雲子の存在を裏付ける史料や証言が発見されていないこと、仇章『遭遇了支那間諜網』に南造雲子という日本人女性スパイが登場すること、仇章『遭遇了支那間諜網』には、南造雲子以外にも奇妙きてれつな日本人の名前が続出することから、南造雲子という名前も実在の人物の名前ではなく、仇章独特の名付け方法によって編み出されたものの一つであると思われること、などの理由から、中国で近年いろいろなメディアで取り上げられる南造雲子は実在の人物ではなく、1943 年に刊行されたスパイ小説『遭遇了支那間諜網』の登場人物・南造雲子を原点として、その後いろいろアレンジが加えられることによって生み出された架空の人物であると考える。

二つ目の謎は、現行版雲子は 43 年版雲子を原点とするという仮説が成り立つならば、43 年版雲子はどのような経緯をたどって、現行版雲子へと大きく変容を遂げたのか、ということである。国民党系スパイの活躍を描く小説『遭遇了支那間諜網』は、1950 年代後半から約 20 年間、共産党政権による取り締まりの対象となり、表の世界から姿を消していた。長い空白期間が生じたことにより、文革終結後には、『遭遇了支那間諜網』の存在を覚えている人もほとんどいなくなったであろう。しかし不思議なことに、登場人物の南造雲子だけは脚光を浴びるようになり、1991 年には南造雲子を主人公とする小説『帝国之花在中国』が出版され、1995 年以降は実在の人物として南造雲子の生涯を紹介する文章が次々に発表される。歴史上の人物が小説の世界に取り込まれて登場人物になるというのは往々にしてあることだが、小説に登場する架空の人物が歴史上の人物と見なされるようになるというのは、稀なケースである。

『遭遇了支那間諜網』（1943 年）は、「遠東間諜戦実録之一」『第五号情報員』（1943 年）の続き物で、表紙には「遠東間諜戦実録之二」と印字されている。また『帝国之花在中国』（1991 年）の裏表紙に印字されている内容紹介には、この小説は「長編紀実小説」であると書かれている。「実録」、「紀実」という文字は、読者に史実にもとづいた作品であると思い込ませて、販売部数を伸ばそうとする

戦略であろうが、このことが架空の人物南造雲子を実在の人物と見なすことに一役買った可能性もある。

日中戦争時期の女性スパイとして、日中両国で抜群の知名度を有するのは川島芳子である。「男装の麗人」、「東洋のマタ・ハリ」として名を馳せた川島芳子は、中国のスパイ小説やスパイドラマなどにしばしば登場し、日本軍スパイ川島芳子と中国軍スパイとの対立の構図を作り上げる。しかし川島芳子は中国国籍の満州族であるため、この対立の構図は、日本人と中国人の対立の構図ではなく、中国人と中国人の対立の構図、満州族と漢族の対立の構図となり、中国政府が警戒を強めている民族独立運動を刺激して助長することにもなりかねない。このような事情から川島芳子に替わる日本軍女性スパイとして、南造雲子に白羽の矢が立ち、フィクションの世界から引っ張り出されたという可能性も考えられるであろう。そして現在中国で語られている川島芳子と南造雲子には、そのスパイとしての経歴に類似点が多数見られることから、現行版雲子は川島芳子像を部分的に取り込み、「帝国之花」、「日本第一女諜」と称される大物スパイへと大きく姿を変えていったと思われる。

フィクションの世界から引っ張り出されて実在の人物となった現行版雲子は、近年になって再びフィクションの世界に舞い戻るようになった。現行版雲子をモデルとする竹内雲子が登場する『五号特工組』（2007 年）が大ヒットしたのを契機に、現行版雲子をモデルとする○○雲子が登場するスパイドラマが次々と制作されるようになったのである。

歴史的叙述は、史料の選択や解釈が叙述者の判断にゆだねられるため、程度の差こそあれ、叙述者の知識や経験にもとづいた主観的要素を含むこととなり、物語性を帯びてくる。歴史とフィクションとの境界をはっきりと線引きすることは困難であり、歴史上の人物が歴史的叙述の文脈ではなく、ルポルタージュ文学、ノンフィクション文学、小説などの世界に移行して、その文脈の中で語られるようになることもしばしばおこる。しかし現在、中国で一般に実在の人物だと見なされ、歴史的叙述の文脈の中で語られている現行版雲子が実は実在の人物ではなく、小説『遭遇了支那間諜網』の中の架空の人物が原点となっているという仮説が成り立つならば、これは小説の登場人物が歴史上の人物へと読み替えられていったという珍しい事例となる。そこで筆者はこの事例に注目して、その背景を探るために、南造雲子にまつわる言説の生成と展開の過程をできうる限り詳細に跡

づけようと試みた。しかし現時点では、現行版雲子と43年版雲子の間を橋渡しする文献として、わずかに1991年刊行の小説『帝国之花在中国』が見つかっただけである。実際にはもっと多く文献が存在するはずである。今後、1970年代後半から1980年代にかけてのさまざまな南造雲子に関する言説を探し出すことができれば、小説『遭遇了支那間諜網』の登場人物・南造雲子がいつごろからどのような経緯で再び脚光を浴びるようになり、現行版雲子へと変容していったのかという過程をより鮮明に跡づけることができるようになるであろう。

註

1　杉野元子「中国語圏映画における川島芳子の表象」、関根謙編『近代中国その表象と現実 ── 女性・戦争・民俗文化』、平凡社、2016年12月刊行予定。

2　矢板明夫「北京春秋　南造雲子ってだれ？」、『産経新聞』、2010年1月20日。

3　林楚は文献⑨の他に「日本王牌女間諜南造雲子」（『文史月刊』2009年7期、47～49頁）という文章を執筆している。しかし、タイトルと小見出しは異なるものの、文面は文献⑨とほぼ同一であるため、リストから外した。

4　王勇「罪悪的“帝国之花”── 日本間諜南造雲子」、『文史春秋』2002年3期、21頁。

5　許定銘「第五号情報員」、『大公報』、2013年5月13日、http://news.takungpao.com/paper/q/2013/0513/1604031.html 最終アクセス 2016年10月10日。

6　「文化部関於続発処理反動、淫穢、荒誕図書参考目録的通知」、中国出版科学研究所・中央檔案館編『中華人民共和国出版史料（一九五六年）』、北京・中国書籍出版社、2001年、2～3頁。

7　志英「川島芳子之死」、『民間伝奇故事（A巻）』2011年6期、49頁。

8　潘銀良「川島芳子与“一・二八”事件」、『世紀行』1994年11期、32頁。

9　范語晨「“男性”依然“凝視”── 抗日諜戦劇『偽装者』熱播現象的女性主義反思」、『新世紀劇壇』2016年3期、63頁。

10　同上、63頁。